一人と一匹

森田れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一人と一匹

【Ｎコード】
Ｎ８６３５Ｌ

【作者名】
森田れい

【あらすじ】
隼人（はやと）が大阪から上京してきて三ヶ月が経った。
ある休日、都内の公園で聞いた、一匹の蝉の鳴き声をきっかけに、今まで押し封じていたさちへの想いがゆっくりと溢れてくる。

大学卒業間近、就職活動に何とか終止符を打つ事ができた。内定先の会社が東京に所在しており、残された一ヶ月足らずの最後の春休みも、結局は東京での新しい住居探しに費やした。

東京は冷たい街だと、二十二年間も生きていると友人からとにかく耳にする。

その抽象的な情報に、どういった所が？と質問すると、何となくだと、開けと言えばゴマみたいな決まり文句が必ず返ってくる。ゴマと聞いて洞窟の隠し扉が開くように、何となくだと聞いてそうかと、僕はいつも口を開いた。

あるミュージシャンも、東京は冷たい街だといった歌詞をスローテンポなメロディーに乗せて謳っていたのだが、テレビの向こう側にいる彼らに質問する術を僕は知らない。

ついには、東京という街が冷たい明確な理由を提示する者はいなかった。

大阪から上京してはや、三ヶ月が経つ。東京が冷たい街がどうかはまだ分からない。

分かった事と言えば、東京の都心部にミンミンゼミが生息している事ぐらいだ。

上京してから休日には、フィルムカメラと読みかけの小説を持って、高層ビルに追いやられ身を寄せ合うように緑が多い公園に出向く習慣がついた。やけに広い公園の中心に向かって歩くと、白く塗られたケヤキのベンチがポツリと姿を現す。ベンチの背後には、何本ものケヤキの木が活き活きと聳え立っており、ベンチへと加工されたケヤキの木が何とも不憫に思えたが、梅雨明けとともに温暖な

気候になっていく中で、ひやりとした冷たさを持つケヤキの木陰が非常に居心地良く、腰をおろして本を開く事にしたのだった。東京に来てから、そういった習慣を幾度も繰り返した。

そして、それは六月末の出来事だった。

みーん、みーんと、ミンミンゼミの鳴き声がかすかに聞こえたのだ。あまりにも時期尚早な事に気づいたのか、やがて鳴き声は次第に影を潜めた。

最初は耳を疑ったのだが、ベンチの向こう側で、しゃぼん玉で遊んでいた花柄の白いワンピースを着た女の子が遊ぶ手を止め、ママー今ね、セミが鳴いたよと、嬉しそうに言っていたのを聞いて、空耳ではない事が分かった。

ミンミンゼミは山間部にひっそりと生息する生き物だと思っていた。

大阪の都心部では、クマゼミの鳴き声が夏の到来を表わす合図だった。又、ミンミンゼミの鳴き声が聞こえる事があっても、夏の終わりに細々と聞こえるのがやっとで、大阪都心部のメインボーカルを買って出る事は最後までなかった。

ヒトは、以前に見た風景やモノの匂い、そして聞いた音等をきっかけに、当時の記憶が蘇ると聞いた事がある。

もうすぐ一年経つのか。夏の終わり、さちと別れたあの日から。都心部にあるキャンパス内の、緑に衣替えをした大きなサクラの木の下で、さちから別れを告げられた時も、珍しく鳴いていたんだよな。か弱く、みーん、みーんと。

「隼人(はやと)、ごめん、好きな人ができた。だからその……別れよう」

気がつけば、さちは泣きながら強く僕の手を握っていた。僕の手をしばらく解こうとしなかった。

しばらく続いた沈黙を、ミンミンゼミが鳴いて破いてくれた。

そしてその鳴き声が、二人の関係の終わりを告げる鐘となっていたのを、今になって気づく。
「分かった。別れよう……」
あるミュージシャンが、恋の終わりは以外と静かだと、謳う曲を聴いた事がある。問いただす必要もなく、二年近く続いた恋の終わりは以外と静かだった。
その後、さちは好きな人と晴れて付き合う事となり、僕はと言えば、就職活動時々、恋愛といった具合で大学の残りの生活を費やし、一方はかねてからの夢であった広告のクリエイター職に就き、見事成就したのだが、もう一方は残念ながら、成就する事はなかった。
別れを告げられた当時の僕は、少なからずプライドがあったのだと思う。プライドが邪魔をして、強く握ってくれていた、さちの手を自ら解いてしまった。今思えば、決して解いてはいけなかった小さな優しい手を。

しゃぼん玉で遊ぶ女の子を、さちはよく写真に撮っていた。ぐすんと、瞳を潤わしながら、さちはよく本を読んでいた。
上京してから僕は、しゃぼん玉で遊ぶ女の子に、少し離れた所でフィルムカメラのピントを合わせるようになった。休日を楽しむ家族連れに目が赤くなっているのをばれぬよう、大きなケヤキの木の下で本を読むようになった。
さちとの様々な思い出が、僕の瞼の裏で巡り終わった後、ミーン、ミーンと、今度はしっかりとしたミンミンゼミの鳴き声が聞こえた。何か意を決したかのように絶え間なく、力強く独奏していた。
そうだよ。お前はそんなに長く生きられないのだろう。もっと、もっと力強く鳴くんだ。
鳴ける時に鳴いた方が良いに決まっているから。
できる事なら、大阪にいる、さちの耳に届くように。

（後書き）

感想を頂けたら幸いです！
より精進していきたいと思います！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8635l/

一人と一匹

2010年10月21日22時51分発行